PR〈企画・制作〉産経新聞社営業局

さらなる飛躍の未来に向けて

細菌やウイルスなどの病原体によって引き起こされる感染症予防の最も有効な手段の一つ、それが〝ワクチン〟です。この感染症の予防、研究のため、北里柴三郎博士が私費を投じて設立した北里研究所が100周年を迎えました。第一三共株式会社と北里研究所は、人々の健康と生命を守るワクチンを提供するため、半世紀以上にわたる提携関係と信頼を築き、共に社会貢献に取り組んでいます。

祝辞

輝かしい歴史を次の100年へ

第一三共株式会社 取締役専務執行役員 ワクチン事業本部長
北里第一三共ワクチン株式会社 代表取締役社長
荻田 健

北里研究所が100周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。思えば、研究所を設立した北里柴三郎博士をはじめ、多くの先人たちが、今日のように高度な機器や設備がない時代から輝かしい研究をされてきたことに、改めて感動を覚えます。

私たち第一三共は、北里研究所のワクチン販売を通し、半世紀以上にわたり信頼関係を築いてきました。2008年からはワクチンの研究、開発、製造、販売における連携を深め、現在は合弁会社である北里第一三共ワクチン株式会社を設立しています。

私たちの提供するワクチンは、今も多くの人々を感染症から守り続けています。そうした社会貢献への熱い思いを胸に、次の100年に向け共に歩んでいけることは、私たちにとっても大きな喜びです。北里研究所のさらなる発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

北里研究所、第一三共 その運命的な出会いと足跡

100年前のシカゴで交友を深めた先人たち

1904年、米国のシカゴで万国博覧会が開催されたとき、ミシガン湖を遊覧するヨットに3人の日本人が乗っていました。一人は、第一三共の前身である三共の初代社長、高峰譲吉博士、もう一人は三共の前身である三共商店の設立者、塩原又策、そして中央に座る3人目は北里研究所の設立者、北里柴三郎博士です。

1899年、塩原によって設立された三共商店は、その後1913年に三共株式会社となり初代社長に高峰博士が就任。1918年には後に三共と歩みを共にする第一製薬が発足しています。

左から、三共商店設立者の塩原又策、北里研究所設立者の北里柴三郎博士、三共（現第一三共）初代社長の高峰譲吉博士

3人の志を受け継ぐ北里第一三共ワクチン

北里博士が1914年に設立した北里研究所は、実学の精神のもと国民保健衛生の向上に寄与。1915年にコレラワクチンの製剤化に成功して以来、感染症の研究と予防手段の確立に多大な成果を挙げてきました。

1960年、第一製薬（現第一三共）と北里研究所は提携関係を結び、第一製薬が北里研究所のワクチンの販売を開始します。2008年には相互補完提携契約を締結。感染症予防ワクチンの研究、開発、製造、販売における連携を深めました。そして2011年、北里研究所と第一三共は、北里研究所の生物製剤研究所が行うワクチンの製造・研究開発を担う合弁会社、北里第一三共ワクチンを設立しました。

100年以上前、ヨットに同乗した3人の志は連綿と受け継がれ、いま一つの会社となって社会に貢献しているのです。

ワクチンの開発・提供を通じ 人々の健康と生命を守る

第一三共グループの挑戦

第一三共株式会社 ワクチン事業本部 ワクチン事業部長
北里第一三共ワクチン株式会社 取締役
菊池 正彦

私たち第一三共グループは、世の中の保健衛生に貢献するという視点のもとワクチン事業に取り組んでいます。そのため、多くの叡智を結集できる産学官連携のコラボレーションや、国内のワクチンメーカー、ベンチャー企業、大学、医療機関などとオープンイノベーションを展開し、世の中に必要なワクチンを継続的に提供できる体制を目指しています。

さらに、有効なワクチンの接種率向上のため、国民の正しい理解の醸成など、さまざまな社会貢献活動を推進しています。

そうした思いのもと、私たちは4つのキーポイントを掲げています。その1つは、ワクチンの有効成分となる抗原の探索、2つ目は、高品質なワクチンの生産体制の確立です。

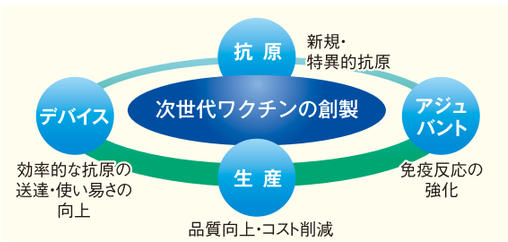
さらに、3つ目はワクチンを標的部位にデリバリーするデバイス技術です。たとえばヒトの皮膚は外部からのバリアー機能が発達しており、皮膚は免疫応答が高いことが知られています。そこで、テルモ社と共同で、皮内にワクチンを確実に投与できる「皮内投与デバイス」を開発し、新たな感染症予防ワクチンの実用化に取り組んでいます。効果が高められればより少量で高い効果を期待できるとともに、接種の負担も減らせるなど画期的な技術イノベーションとして社会に貢献できると思われます。なお、北里柴三郎博士はテルモ社創設発起人の一人であったので、さらに運命を感じます。

4つ目は、抗原に対する免疫応答を高める機能を有するアジュバントの研究開発です。その中で、科学技術振興機構の「産学共同実用化開発事業（NexTEP）」も展開しています。

そして、これら4つを推進することで、次世代ワクチンの創製および高品質なワクチンの安定供給につなげ、世の中の保健衛生に継続的に貢献していきたいと考えています。

ワクチンの研究開発を通し社会に貢献

■ワクチン研究開発における第一三共グループの戦略



人々の命を守るため多大な役割を果たしてきたワクチン

「ワクチン」の重要性について、北里第一三共ワクチン株式会社開発研究本部の長井正昭氏と、第一三共株式会社ワクチン事業本部の上田徳仁氏、武下文彦氏にお聞きしました。

ワクチンは予防医学や公衆衛生分野で最も大きな貢献をした手法の一つで、現在は約30種類の感染症がワクチンにより予防可能となっています。ワクチンで防げる病気はVPD（Vaccine Preventable Diseases）と呼ばれ、予防接種をすることで多くの命を救い、疾病負担を軽減することができます。

ワクチンを接種した本人の健康を守ること、お母さんに接種することで生まれてくる次の世代の命も守ることができます。さらに、社会全体で予防接種を受けることにより、ワクチンを接種していない人も守られます。そして最終的には天然痘のように撲滅できる感染症もあるのです。

すべての人に知ってほしい「ワクチンで防げる病気＝VPD」

たとえば、1961年にポリオの流行が急拡大したとき、当時の厚生大臣の英断でポリオワクチンを緊急輸入し、患者数を劇的に減らすことができた例もあります。ワクチンによって多くの子どもたちが守られたのです。

しかし、ワクチンの重要性は普段は意識されにくく、患者がほとんど発生しなくなった感染症に対してのワクチンは接種しなくてもいいという誤解がしばしば生じているのは問題です。

世界では「Value of Vaccine（ワクチンの価値）」といわれ、リスクやコストだけを注視するのではなく、ワクチンがどれだけ人々の健康や命を守っているかを理解することが重要視されています。VPDが原因で健康を損ねたり命を落としてしまうことのないよう、すべての人が理解を深める必要があります。